

Do-Re

北海道立図書館レファレンス通信

18 (通巻22号)

平成17年3月30日発行

【目次】

こんなのきました - 参考調査課によせられたレファレンス - 【22】 他機関への照会のススメ ~利用者のためにできること~	1
こんながあります - いちおしレファレンス・ブック - 【12】 実践的図書館用語辞典を推す	2
Librarian's Box (ししょぼこ) 【9】 国立国会図書館 HP「雑誌記事索引の検索」を使いこなそう!	3
[特集] 図書館職員の研修	
講師編 1 レファレンス・サービスを広げるために 平成16年度上川管内図書館協議会研究集会	4
2 レファレンス・インタビューの工夫 平成16年度十勝管内公共図書館協議会第3回司書部会研修会 及び平成16年度上川北部公共図書館(室)職員研修会	5
受講編 1 平成16年度レファレンス研修(国立国会図書館)	6
2 平成16年度科学技術資料研修(国立国会図書館)	7
3 2004年度児童図書館研究会全国学習会大阪学習会 ~児童サービスの理論と実践~	8
News	9
1 「貸出文庫」2タイトル増えました。	
2 平成16年度「レファ研」10名が受講!	
3 蔵書点検、終了!	
4 土幌町したしみ図書館の相互貸借「貸出条件」の変更について	
編集後記	9



北海道立図書館

〒069-0834 北海道江別市文京台東町4-1番地
TEL 011-386-8521
FAX 011-386-6906

<http://www.library.pref.hokkaido.jp>

こんなのきました - 参考調査課によせられたレファレンス - 【22】

他機関への照会のススメ ~ 利用者のためにできること ~

ある日封書で届いた個人の方からの 1 件のレファレンスです。「アメリカ公法 480 号の日本語訳と原文の複写がほしい」。レファレンスの中でも法律に関係するものには苦手意識があったのですが、着手することにしました。

「法律を調べるにはまずはコレ！」と、『リーガル・リサーチ』(いしかわまりこ〔ほか〕著 日本評論社 2003 Do-Re No.12 参照)で紹介されている、外国の法令の調べ方について読んでみました。するとそこには、「調べ方の紹介を始めるとそれだけで本 1 冊ほどの分量になってしまう」との記述が。ここではっきり、大変なレファレンスを受けてしまったことを再認識しました。

とりあえず、外国法の調べ方についての解説書にも何冊かあたり、次にインターネットで調べていくと、この法律が 1954 年に制定されたものであることや、アメリカの法令を検索するサイトらしきものには辿り着いたものの、なにしろ法律の正式名称もこの時点ではわからなかったため、四苦八苦しあと一歩のところまでたどり着けません。(やはり司書たる者、英語ぐらいはできなくてははいけませんね・・・)

そこで、他の課員に相談したところ、「こんな時には・・・！」と、外国法の専門家である友人に、「実は今、こんな法律を探しているのだけれど苦労していて・・・。」というメールを出したのです。するとこの方はすぐに色々調べてくださり、公法 480 号(以下『PL480』)の原文(改定後の最新版)が載っているサイトのアドレスと、訳文の掲載雑誌、そして制定当時のものの探し方などについて、非常に丁寧な返事をくださったのでした。

PL480 の訳文は、『大蔵省調査月報 1954 年 8 月号』に数頁にわたって掲載されていて、こちらはなんと当館でも所蔵していました。

原文については、利用者が求めていたのはネット版の最新の(改正された)法律ではなく、制定当時のものということだったので、札幌のアメリカン・センターレファレンス資料室へ照会してみました。するとこちらでも迅速・丁寧な対応をしていただき、札幌では入手できないからと東京に問い合わせ、有料データベースの「Lexis / Nexis」から複写を入手できるとの返答をいただきました。

以上の過程を利用者に説明し、複写物についてはそれぞれ申し込んでいただくことにし、一件落着となりました。利用者にも「こんな昔の外国の法律でも、手に入るものなんですねえ!!」とたいそう喜んでいただけました。

今回の事例で学んだのは、「手を尽くしてもわからない時には、一人で悩まず他の人や機関に相談すること」でした。「こんなことを尋ねるのは気が引ける」と、他館や専門機関への照会は躊躇するものですが、いざしてみると、なんとスムーズに問題が解決することか！今回は外国法に詳しい友人に訊いてみる、という特殊な例でしたが、「あそこに訊けばもっと有効な手段がわかるかも・・・」というような時には、勇気を出して照会してみることが、最終的には利用者の役に立てるのではないのでしょうか。

同様に、市町村の図書館(室)のみなさんには、もっともっと気軽に道立図書館を利用していただきたいと思います。自館のツールで限界がある時には、どんどん道立などと協働し、北海道のレファレンスを盛り立てていきましょう！

こんなのあります - いちおしレファレンス・ブック - 【12】

実践的図書館用語辞典を推す

今回のオススメは、待望久しかったこの本を取り上げます。

『最新図書館用語大辞典』(図書館用語辞典編集委員会編 柏書房 2004.4
643p 22cm 8,500円) <請求記号: 010.33/SA>

本書は、1982年に刊行された『図書館用語辞典』(図書館問題研究会用語委員会編 角川書店刊 以下「旧版」という)を改訂、増補し、書名も改めて刊行されたものです。

刊行までの経緯については、旧版の編集委員の一人であり、また今回は編集委員会委員長として編集に携わられた大塚敏高氏(神奈川県立川崎図書館)による報告(注1 以下「報告」という)があります。この「報告」を参考にしながら、旧版との比較を試みようと思います。

「旧版」の刊行から22年が経過しました。監修者、執筆者の顔ぶれの変化を見て、20年以上の歳月の重さを感じるのは、私だけではないでしょう。因みに「旧版」の監修者は清水正三、久保輝巳の両氏、新版では後藤暢、酒川玲子、松岡要、山口源治郎、山重壮一の五氏となっています。

図書館界のこの20年は、実に激動の時代であり、今もその渦中にあります。特にコンピュータ技術、IT関連の進歩は図書館業務を一変させ、また図書館業務の民間委託やPFIの導入の動きなど、図書館の管理運営面での変化も著しいものがあります。

このような変化を可能な範囲でギリギリまで反映させ、「指定管理者制度」のような新しい項目も急遽採用するなど、編集上の努力を惜しまなかった姿勢に拍手を送ります。

では具体的にどんな辞典になったのか触れてみようと思います。先の「報告」によれば、採録用語の数は、解説が付されているものが1,827語、解説は無く参照を示すものが94語、「旧版」では解説を付したものが1,900語となっています。新規に採録したものが約400語あるのに語数が若干少なくなっているのは、印刷や出版流通関連語を削除したり類似語を整理したことによるとしています。また、コンピュータ関連は「旧版」が81語に対し126語と大幅に増加しています。

全体としての頁数を抑えながら必要な項目を加えるために、あえて削除されたものがあると推察されますが、図書館史上の人物名(例:今沢慈海)の参照や装丁、製本関連の図版(例:フランス装、無線綴じ)をはじめとして多くの図や表が無くなった事は、利用上、注意が必要です。あえて言えば、辞典としての面白みが無くなったように思われますし、学生、初学者向けとしては難易度が高くなったのではないかと思います。

それでもなお信頼を寄せるに足るものがあるとすれば、それは本書の「帯」に書かれているキャッチフレーズにもあるとおり「叙述につらぬかれる専門職集団の現場感覚」に他なりません。110名に上る執筆者は、そのほとんどが現職の図書館職員です。それぞれの職場で、困難さを増す状況の中で、図書館の将来を一步でも切り開こうとする熱意と現場感覚が、本書の身上です。それは「旧版」の時と変わらぬ本書の特長と言えるでしょう。

たくさんの現場で活用し、本書の内容を豊かにしていけるよう願います。

(注1)『最新図書館用語大辞典』の編集を終えて」(『みんなの図書館』No.335 2005.3)

Librarian's Box (ししょぼ) 【9】

国立国会図書館 HP 「雑誌記事索引の検索」を使いこなそう！

「『芸術新潮』に建築家伊東忠太の記事が載ったことがあったと思うがいつごろだったのか。」

「『日本の温泉の化学的特徴について』(後藤達夫著)という雑誌記事が読みたい。」

といった雑誌の内容について確認したいというレファレンスをうけることがあります。 の質問のような場合ですと雑誌名がはっきりしているの、実際に『芸術新潮』を見て調べるという方法もありますが、所蔵しているバックナンバーには載っていないこともあります。また、 の質問になると該当しそうな雑誌をすべて確認するという事は合理的とはいえず、お手上げの状態になります。

このような雑誌記事の検索でよく利用するのが、国立国会図書館 HP の「雑誌記事索引の検索」です。これは国立国会図書館が収集・整理した国内刊行欧文雑誌(一部外国刊行欧文雑誌・国内刊行欧文雑誌を含む)から、「雑誌記事索引採録誌選定基準」及び「雑誌記事採録基準」により選定された採録誌 15,533 誌(2005年1月28日現在)について記事の掲載誌・掲載箇所を、論題名、論題中の単語、著者を検索語として検索できます。

ここをクリック！



チェックボックスの確認を忘れずに！

の場合 「論題名：伊東忠太」「雑誌名：芸術新潮」で検索。

の場合 「論題名：日本の温泉の化学的特徴について」で検索(単語の掛け合わせでも検索可能)

検索した記事情報には論題名、国立国会図書館請求記号、雑誌名、出版者・編者、巻号・年月日、ページがあり、国会図書館以外の所蔵館を探す場合の書誌確定にも役立ちます。

現在、採録誌は『サンデー毎日』、『週刊読

売』、『週刊朝日』、『週刊現代』、『週刊文春』、『週刊新潮』、『週刊ポスト』、『週刊宝石』、『Aera』、『週刊金曜日』...といった柔らかめの雑誌から研究紀要まで多岐に渡っています。

雑誌のレファレンスがあった場合は試してみてもいいでしょうか？

[特集]図書館職員の研修 講師編 1

レファレンス・サービスを広げるために - 平成16年度上川管内図書館協議会研究集会 -
(参考調査課 加藤 ひろみ)

昨年11月に旭川市中央図書館で開催された研究集会で、お話をさせていただく機会がありました。そもそものご依頼は、北海道図書館振興協議会で毎年実施してきた新任職員研修が今年度は無かったことや、管内は小さな図書館(室)が多く、また経験の浅い職員も多いので、レファレンスについて基本的な話をしてほしいとのことでした。しかし、参加者名簿を事前に送ってもらったところ、ベテランの方々も多かったので、初歩的な話だけでは申し訳ないと課員とも相談し、「レファレンス・サービスを広げるために」と題し、次の内容で進めました。

- 1 レファレンス・サービスの重要性
- 2 住民はレファレンス・サービスをまだまだ知らない
- 3 わかりやすい案内表示とPR
- 4 迅速・的確に応えるために
- 5 情報交換

住民にとって、日常の様々な場面でレファレンス・サービスを活用することは、非常に有効でありながら、首都圏でさえまだまだ認知されていない現状は、過去のアンケート調査等でも報告されています。「レファレンス・サービス」をどんな言葉で、どこに、どのように案内したら、もっと利用されるのか。参加者に考えていただきたいことの1つでした。ヒントになればと、図書館関係の雑誌に紹介された案内表示の事例写真や、種々の図書館の利用案内リーフレットなどを見てもらいました。

因みに私が案内表示を考える契機となったのは、国立国会図書館での平成12年度レファレンス特別研修への参加でした。案内表示に限らず、3日間ここで学んだことは非常に有意義で、今でもその時の資料が役立っています。実務は勿論、当館での各種研修に応用もしました。当課で行う市町村図書館職員レファレンス体験研修の受講者にも、「案内表示どうしていますか?」と問うたことがありました。「案内表示を出す方がいいとは思いますが、レファレンスにうまく対応する自信がないので...」という返事。ああ、私は現場の苦労がわかっていなかったと反省した瞬間でした。

臆せず迅速・的確に回答するためには、まずは自館資料に精通することだと思います。『実践型レファレンス・サービス入門』(日本図書館協会 2004) p109に、蔵書が少なくても、司書がいて自館の資料を知り尽くしていると、たとえ大事典が無くても解決できる実例が紹介されていますが、ここを目指したいというのが、伝えたいことの大きな1つでした。演習として、旭川市中央図書館資料調査室の参考圖書の書架から、小図書館でも備えて活用したいツールを各自1冊選んで、その特徴や利便性を発表してもらいました。不慣れな書架、限られた時間の中で、皆さんなるほどという資料を選んでいました。紙面の関係で紹介できないのが残念です。

最後に質疑の中で、よく来館する高校生が自分で調べようとせず、職員が回答を示さないと納得しないが、そういうものかというのがありました。ケースバイケースですが、この場合は来館者で生徒でもあり、調べ方を案内するのによいと思うと答えました。勿論、来館者であっても職員も一緒になって調べないと回答に至らない事項もありますし、特に来館できない場合などは、この資料にはこう書かれていると典拠を示して回答することが多いわけで、言葉足らずであったと反省しています。やはり、基本的な話をもう少しすべきだったかもしれません。

先の国会図書館の研修時に、研修を受ける意義・目的として、

1. 自身および自館のレベルを知る
2. 研修の企画・プログラムを組めるようになる
3. 研修の講師ができるようになる

と教わりました。2・3はなかなか思うに任せません。準備不足と生来の口下手で満足はいくお話ができず心苦しいですが、貴重な勉強の機会をいただいたことに感謝しています。

[特集]図書館職員の研修 講師編 2

レファレンス・インタビューの工夫

- 平成 16 年度十勝管内公共図書館協議会第 3 回司書部会研修会

及び平成 16 年度上川北部公共図書館(室)職員研修会 -

(参考調査課 宮本 浩)

「レファレンスで大切なのは答えが何かではなく、質問が何かである。」といわれます。けれども、実際の日常業務におけるカウンターや電話などで、利用者からの質問事項をうまく聞き出し理解することは、なかなか難しいものです。そこで効果的なレファレンス・インタビューが必要となるわけですが、図書館資料を熟知し、各種の情報をスムーズに扱うことができ、きちんとした接客態度が備わっていなければ上手くできません。これらをスキルとして身に付けるためには、図書館職員として多くの経験を積むことが必要ですし、同時に体系的な研修の実施が求められてきました。

今から 35 年ほど前に書かれた論文「**図書館・図書館学の覚え書き**」(三上美代子氏)⁽¹⁾にも、“参考業務に関する専門的な研究は、近頃ずいぶん進んでいるが、対話としての「接遇」に関しては、深い関心が払われていないのは、片手おちではないだろうか。(中略)(接遇に関しての)図書館独自の訓練や研究がなされるべきであると思う。”という記述が確認できます。

最近では、図書館員を対象とした研修の中で「接遇」を取り上げる機会もありますが、多くの場合、一般的な窓口業務に従事する者に対する基本的なマナーを主とするもので、図書館業務に即したものとは言えません。またレファレンス・インタビューを主とする内容の研修は、未だあまり実施されておりません。

当課で平成 13 年度から実施している「市町村図書館職員レファレンス体験研修」(以下、「レファ研」)の中でもレファレンス・インタビューをカリキュラムの一つとして設定し、私を含む何名かの職員でいくつかのパターンにより対応しましたが、内容の充実については模索の状態でした。

このような現状から、なんとかレファレンス・インタビューを研修としての型にしたいという思いを強く持っていましたが、今年度初めに北海道教育委員会職員を対象とした**ビジネス対応マナー研修**⁽²⁾に参加したことをきっかけに、その内容の一部と今までのレファ研での対応例、当課のレファレンス事例、カウンターでの経験、課員からの助言、そして市町村図書館の方々から得た情報等を結びつけ、次のように組み立てることができました。

全体の構成は、「心得編」「技術編」「実践編」の 3 つの柱からなります。

「心得編」では、接遇の基本とコミュニケーションのコツについて取り上げます。

「技術編」では、実際のレファレンス・インタビューを行うにあたってのポイントを、私自身のオリジナルと図書館学の専門資料から引用した事項について解説します。

「実践編」では、当課でのレファレンス事例を中心とした問題を設定し、想定されるいくつかのケースについて対応を考えていただきます。

そんな折、2 つの管内協議会研修会から、講師の御指名をいただきました。内容は任せられましたので、あえて「レファレンス・インタビュー」をテーマとして設定し、先の 3 つの柱を資料にまとめ、お話させていただきました。受講された皆様のご感想はいかがなものでしょうか。

研修会で使用した資料は、レファ研でも活用しています。今後も、この型を基本型として、各々の内容をさらに充実したものに改良していきたいと思います。

図書館のレファレンス・サービスは、まだまだ一般の方々に認知されておりません。ひとりでも多くの方にこのサービスを知ってもらい活用していただくためには、私たち図書館職員が、一步踏み出さねばなりません。「尋ねてくれれば調べますよ。」という姿勢ではいけません。利用者が調べていることや知らないことを他人である私たち図書館職員に尋ねる“**勇気**”を理解しなければなりません。図書館にはあらゆる世代の方が、様々な目的をもって来館します。誰もが声を掛けやすい雰囲気づくりを心がけましょう。それも司書としての専門性と言えるのではないのでしょうか。

今後も、この度の経験を活かし、より多くの方に図書館サービスを知っていただくよう努めてまいります。市町村の皆さん、共に手を携えステップ・アップを目指しましょう！！

参考 (1) 『神戸山手女子短期大学紀要 第 12 号』 1969.12 p857-865

(2) 「ビジネス対応マナー研修 ~接客の基本とコミュニケーション~」

(S.PLANET 瀬川弘恵氏 平成 16 年 5 月 28 日 於北海道立教育研究所)

[特集]図書館職員の研修 受講編 1

平成16年度レファレンス研修(国立国会図書館)

(北方資料部 中田 こずえ)

2月17日・18日の2日間、国立国会図書館主催のレファレンス研修に参加しました。北は北海道から、南は九州の福岡・大分からの23名の参加でした。

その内容は、「レファレンスを巡る今日の課題」(国立国会図書館主題情報部参考企画課長補佐 大場利康氏)、「レファレンス・プロセス」(玉川大学教育学部助教授 斎藤泰則氏)、「人文科学系ツールの紹介」(国立国会図書館主題情報部人文課人文第二係長 浜田久美子氏)、「法令・議会情報の調べ方」(同館調査及び立法考査局議会官庁資料課議会・政治資料係長 金井ゆき氏)、「ワークショップ:レファレンス・プロセスの評価・分析」(司会・講評:斎藤泰則氏、講評:大場利康氏)、事前課題も出され、大変中身の濃い研修でした。その中からいくつか印象に残ったことをご紹介します。

調査の難易度が上がっている！

は、国立国会図書館のホームページ(<http://www.ndl.go.jp/>)にある「テーマ別調べ案内」にプラスアルファした内容。レファレンス・ツールと、その比較・使い分けなどが紹介されました。その前段の「インターネットの普及によって、簡単な質問は減少し、事典などの参考図書だけではわからない質問の割合が増えてきており、調査の難易度が上がっている。」という説明には全く同感！また、国会図書館では館内用(職員用)のホームページがあり、それを利用して「調べ案内」などの自館作成ツールを共有し、随時更新しているようで、この方法を当館でも取り入れられないかと考えました。使えるツールとするためには、情報をためていくだけではなく、更新が必要ですよ。

重要なのは質問の背景を知ること！

が今回の研修のメインでした。レファレンスの理論面から、レファレンス・インタビューを中心に学びました。例えば、「教育問題に関する図書はどこにありますか？」という利用者の質問が、インタビューをすることで「いじめられている子どもを持つ親の参考になる資料」「戦前の祝祭日の歌が載っている資料」「教育問題というだけで具体的なテーマは決まっていないが、レポート課題の材料がほしい」等々、さまざまに展開される可能性があるということです。各参加者が持ち寄った事前課題を事例として理論的に分析しました。インタビューのポイントやテクニックはもちろん大切ですが、今回印象に残ったのは、利用者が質問を提示する、その背景を知ることが重要だという、講師の説明です。確かに、そういう観点でインタビューを進めていけば、回答への早道になりそうです。

情報収集にブログ！

では、図書館界の今日的課題について、レファレンスを中心に紹介されました。財政事情とか、インターネットの普及によってとか、問題は種々あるのですが、「今、誰がどんなサービスをするのかが問いかけなおされている」という講師の説明に大きくうなずきました。

多くのサイトを紹介されましたが、図書館界でもブログが充実してきていることを、この席で初めて知りました。最近世の中の変化が激しく、雑誌でさえ情報が遅いと感じることがあります。団体のホームページでも、公式なお知らせとなればそれなりに時間もかかり、決定事項でなければ公表が見合わせられることもあると思います。でも、ブログなら！！不確定な段階でも情報が得られる可能性があるし、もし間違い情報だとしても、別の人が訂正してくれたりするもの。私は、まずは情報ツールとしてのぞいていきたいと考えていますが、もともとは情報発信・コミュニケーションのためのシステムだと思います。議論好きな方には特におすすめです。

参考 図書館系ブログ集 http://popup6.tok2.com/home2/lib110ka/link/link_blog.html

[特集]図書館職員の研修 受講編 2

平成16年度科学技術資料研修(国立国会図書館)

(参考調査課 宮本 浩)

3月3日(水)4日(木)の2日間、国立国会図書館関西館において開催された「科学技術資料研修」に参加しました。科学技術分野の専門的資料に関するレファレンス対応が迅速かつスムーズになされるために、国立国会図書館で蓄積された情報を理解することを目的とした研修で、国立国会図書館で所蔵するこれらの資料の紹介とその検索方法、Web上の無料サイトを中心としたレファレンスツールの紹介、国立国会図書館以外の機関からの資料の入手方法の紹介、及び検索演習が主な内容でした(参加者の図書館別の内訳は、都道府県立8名、市区町村立3名、大学16名、専門1名。日程は右記の表参照)。

まず、「概論」として科学技術資料の紹介があり、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書(科研費報告書) 欧文会議録、博士論文、規格、テクニカルレポート、学協会ペーパーで、各々について 資料の概要 国会図書館における所蔵の範囲 国会図書館所蔵の検索方法 書誌事項の確認方法やその他のポイントなど、詳細な解説がありました。

「レファレンスツールの紹介」では、国会図書館のOPACの関係資料の検索の仕方のほか、ホームページで提供されている「テーマ別調べ案内」「参考図書紹介」「日本科学技術関係逐次刊行物総覧」のほか、利用機関限定(当館での利用可能)の「目次検索システム」(レファレンス情報システム)と、「概論」で紹介された資料群毎にWeb上で提供されている検索ツールのいくつかについて、その使い方等の解説がありました。

最後の「検索演習」では、講義で紹介された各資料の書誌事項を確定することを主とした例題があたえられ、紹介されたWeb上の検索ツールや国会図書館科学技術・経済情報室で提供中の有料データ・ベースを実際に利用し体験することが出来ました。

当研修で紹介された科学技術分野の資料は、当館においてもあまり手にすることがなく、また事前に提供された宿題は、英文の引用例(科学技術資料であるから当然ではあるが...)から該当する資料群を結びつけるというもので、少々不安を感じつつの参加でした。全般的に各講義とも中身が濃い詳細な説明が、次々と展開されたため、十分に理解し自分のものとするためには何度も繰り返し復習するの必要を感じています。

しかし、実際に関係分野のレファレンスを受けた場合、今までは四方八方手当たり次第に手を尽くし、なんとか書誌事項にたどり着いていた現実を省みると、確かな道しるべを示された気分です。

公共図書館におけるレファレンス・サービスの幅を広げていくためにも貴重な研修となりました。

今後、当研修で得た知識・情報等は、当誌をはじめ日常のレファレンス対応やレファ研で提供・還元できればと思います。では、その第1弾として、研修で取り上げられたWeb上のベーシックなデータベースの一部を紹介します。

3月3日(木)	
10:00~11:00	科学技術資料概論(1) 国立国会図書館における収集・利用
11:00~12:00	科学技術資料概論(2)資料紹介1 総論・洋誌ほか 文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書
13:00~14:30	科学技術資料概論(3)資料紹介2 欧文会議録・博士論文 規格・テクニカルレポート・学協会ペーパー
14:30~15:15	閲覧室及び書庫見学
15:15~17:00	レファレンスツール紹介
3月4日(金)	
10:00~12:00	図書館における科学技術情報サービスの新たな試み 「科学と産業の情報ライブラリー」を目指す 神奈川県立川崎図書館のサービスと蔵書構築
13:00~16:30	科学技術資料の検索 演習・質疑

【所蔵機関目録】 皆さんおなじみの「国立国会図書館 NDL-OPAC」と「国立情報学研究所 NACSIS Webcat」は省略します。

- 1 JST資料所蔵目録 (<http://opac.jst.go.jp>)
科学技術振興機構が提供。国内雑誌・外国雑誌・会議資料・公共資料・学協会ペーパー・技術レポートを収録。
- 2 British Library Integrated Catalogue 英国図書館 (<http://catalogue.bl.uk/>)
<文献複写> <http://www.bl.uk/services/document/articles.html>
- 3 Library of Congress Online Catalog 米国議会図書館 (<http://catalog.loc.gov/>)
<文献複写> <http://www.loc.gov/preserv/pds/copy.html>
- 4 CISTI (Canada Institute for Scientific and Technical Information カナダ国立科学技術情報機関)
(<http://cat.cisti.nrc.ca/search>)
<文献複写> http://cisti-icist.nrc-cnrc.gc.ca/docdel/supply_direct_e.shtml
- 5 COPAC 英国CURL総合目録 (<http://copac.ac.uk/>)
英国のResearch Librariesのコンソーシアムの総合目録(大学図書館等26館)
- 6 DDB目録 ドイツ国立図書館 (<http://z3950gw.dbf.ddb.de/>)
- 7 GBV-Common Union Catalogue ドイツ北部7州総合目録 (<http://gso.gbv.de/DB=2.1/LNG=EN/SRT=YOP/IMPLAND=Y/>)

[特集]図書館職員の研修 受講編 3

2004 年度児童図書館研究会全国学習会大阪学習会 ～児童サービスの理論と実践～

(参考調査課 伊藤 嘉奈子)

3月6日(日)・7日(月) 当館初の蔵書点検の真っ只中に大阪で行われた児童図書館研究会(以下「児図研」)の全国学習会に、私および資料課佐々木が自主参加して参りました。会場は、初日が「太陽の塔」の見えるホテル阪急エキスポパーク、2日目はそこからモノレールの駅を挟んで向かい側にある、国立民族学博物館で、閉会式後には大阪府立国際児童文学館で見学ツアーも行われました。

第1日目、岩田美津子氏(ふれあい文庫)による講演「親子で絵本を読む大切さとすばらしさ」では、「目の見えない親(岩田さん自身も)でも親子共通の絵本体験が実現できるように」と始めた、点訳絵本の制作やその普及活動について、またバリアフリー絵本を読み聞かせる意義についても語られました。「読み聞かせの共有体験があったことで、子どもが反抗期になってもお互いの心が見えたと思う」とおっしゃっていたのが心に残りました。

分科会は、ストーリーテリングやブックスタート、書評の書き方など、全部で6つに分かれ、そのうち私は「ヤングは今、なにをよんでいるか」に参加しました。大阪の市立高校に勤める3人の司書の方々による、今の高校生の状況や人気本についての発表もさることながら、お三方の学校図書館についての真摯な姿勢や、生徒に本を手渡すための熱い想いには、公共図書館司書としても見習うべき点が多く、大変刺激を受けました。

懇親会を終え、夜のお楽しみ会では、なにわ語りやふれあい遊びなど5つある中、の「ブックトークの部屋」に参加しました。北島博子氏(子どもの本・ブックトーク研究実践家)が小学生向けの「お客さま」というテーマで、二井治美氏(草津市立南草津図書館司書)が中学生向けの「Who am I?」というテーマで、それぞれ実演をしていただきました。恥ずかしながら私は、ブックトーク自体を見たのはこれが初めてだったのですが、あるテーマに基づき、次から次へとさまざまな本が紹介されていくのがとてもおもしろく、本の世界へと引き込まれました。

第2日目の福嶋礼子氏(元東京都江東区立図書館司書)による講演「児童図書館研究会50年史を編集して」では、児童サービスのこの50年の動きを感慨深くお話してくださいました。

江口一久氏(国立民族学博物館教授)による特別講演「文化の始まりはおはなしから -西アフリカ昔話の魅力」では、西アフリカのカメルーン・フルベ族で語り継がれている物語についてと、実際に昔話の語りの実演もやっていただきました。

そして府立国際児童文学館では、明治時代からの子どもの本約70万点のコレクションを見学させていただきました。

「子どもを知る」・「子どもの本を知る」そして「実践する」という視点で開かれた今回の学習会は、どの時間も非常に興味深く、開会式挨拶で児図研運営委員長の黒沢克朗氏から「近頃の図書館職員は元気がない。学習会に参加した人が、元気になって帰ってほしい」という言葉にあったとおり、帰道後の蔵書点検後半戦(?)およびこれからの児童サービスに向けての糧とすべく、十分に鋭気を養ってきたのでした。

分科会

- 「ストーリーテリングとおはなし会～耳からの読書ととりもどす～」(大月ルリ子氏)
- 「紙芝居屋の来る町大阪～街頭紙芝居に学ぶ～」(鈴木常勝氏)
- 「赤ちゃんと絵本～今、なぜブックスタートなのか～」(正置友子氏)
- 「子どもの本を知る～絵本・児童文学・科学読物～」(土居安子氏, 市川美代子氏)
- 「ヤングは今、なにをよんでいるか」(木村真砂美氏, 田代幸子氏, 吉元美津子氏)
- 「ブックガイド・書評の書き方」(川上博幸氏)

夜のお楽しみ会

- ながいおはなしの部屋
- なにわ語り部の部屋
- わらべ歌とふれあいあそびの部屋
- ブックトークの部屋
- お楽しみ会の部屋(パネル, 人形, その他いろいろ)

NEWS

1 「貸出文庫」2タイトル増えました。

平成16年度、「貸出文庫」として次のタイトルを収集しました。昨年3月にお送りした『貸出文庫目録』(追補版)に追加してご利用願います。

- (1) 光る大雪 小椋山博著 講談社 2002.6 <請求記号:F>
- (2) 静かな大地 池沢夏樹著 朝日新聞社 2003.9 <請求記号:F>

2 平成16年度「レファ研」10名が受講!

平成13年度から当課で継続して随時実施しております市町村図書館職員レファレンス体験研修(通称「レファ研」)に今年度も多くの方が参加していただきました。担当した私たちも多くの情報提供を受け、より良いコミュニケーションにつなげることが出来ました。新年度も継続して実施しますので、多くの参加をお願いします。

3 蔵書点検、終了!

去る3月1日~13日の期間、臨時休館し当館が現在の地に移転して以来の蔵書点検を行いました。対象とした資料は、雑誌・AV資料を除く全図書で、司書職全員で初めての体験をしました。この点検により、資料の「場所区分」が明確となり、日常の出納業務がスムーズに行えるようになりました。

4 土幌町たししみ図書館の相互貸借「貸出条件」の変更について

次のとおり申し出がありましたので、貸出申込みの際はご注意ください。

相互貸借<検索と申込み>の基本原則付属資料/道内市町村立図書館(公民館等)貸出条件一覧(平成15年4月1日現在)の該当部分を変更ください。

- 「申込受付方法」から電話を削除。 「貸出中資料への予約の可否」を条件付き可とする。
- 「貸出不可の資料」を禁帯出資料とする。 「新刊書の貸出し」を受入後3ヵ月は不可とする。
- 「備考」に予約は来館者を優先するとする。

編集後記

今年度ギリギリに完成を見たDo-Reです。蔵書点検、大阪児図研、レファ研(2町)と、今月はかなりハードでした・・・が、いろいろな出会いも経験でき、よい年度の締めとなりました。(I)

今回、国立国会図書館ホームページの雑誌記事索引を紹介しましたが、このホームページは他にもいろいろ面白いコンテンツがあります。ぜひ、いろいろクリックしてみてください。(H)

拙稿でも触れましたが、さすがに国会図書館の研修はどれも内容が充実しています。今年の参加者の報告会が今から楽しみです。業務で皆さんに還元できればと思います。プラス、倦まず弛まずの自己研鑽が大事ですね。と思いつつ、疲れ気味の毎日です。(ひ)

今年度の最終版をお届けします。市町村の皆さんの様々なご協力のおかげで、この一年を乗り切ったというところです。次年度は北図振の研修事業でレファレンス部門を行います。乞うご期待!(S)

今回は、後半部分を「図書館職員の研修」と題しての小特集を組みました。今年度、当課職員は、いくつかの研修会等で講師を経験させていただき、また種々の研修・研究集会に参加しました。その一部ですが、情報提供の意もこめでの企画です。国立国会図書館のレファレンス研修に参加した北方資料部職員の寄稿もあります。

日常業務に追われる毎日ですが、自分を研くことは大切です。新年度はさらなるステップ・アップに努めましょう。(宮)



Do - Re(どうれ) の由縁

“どうりつとしょかんレファレンス”の
略から名付けました。
しかしながら
“どれどれレファレンス”からの説もあります。

THE REFERENCE NEWSLETTER OF HOKKAIDO PREFECTURAL LIBRARY

Do-Re

北海道立図書館レファレンス通信 18(通巻22号)

発行年月日 平成17年3月30日

編集 北海道立図書館参考調査課

発行 北海道立図書館

〒069-0834 北海道江別市文京台東町41番地

TEL 011-386-8521 FAX 011-386-6906

<http://www.library.pref.hokkaido.jp>
